

TOPIX

修了生が語る ぶぎん経営幹部養成塾の魅力

ぶぎん地域経済研究所では、次代を切り拓く経営幹部の育成を目的に、2011年度から毎年「ぶぎん経営幹部養成塾」（以下、養成塾）を開講（共催：武蔵野銀行）しており、これまでに延べ360名以上の修了生を輩出しています。

昨年度は「新たな経営手法と未来戦略を創造する」をテーマに、アフターコロナの経営環境を踏まえたDX（デジタルトランスフォーメーション）戦略や、ダイバーシティ&インクルージョン（多様な人材を受け入れ、その能力を発揮させる考え方）等の旬のトピックも取り入れ、トレンドを押さえた経営手法を幅広く学びました。グループディスカッションや1泊2日での合宿研修、交流会などを通じ、さまざまな考え方や情報を吸収できる全7回にわたるカリキュラムとなっています。

今号と次号では、修了生からその貴重な体験談を伺い、養成塾の魅力についてご紹介いたします。第1回は平和産業株式会社（さいたま市南区）の後藤さんにお話を伺いました。



「2024年度ぶぎん経営幹部養成塾」は2024年10月開講予定です。

2023年度修了生

平和産業株式会社

品質保証部 部長 後藤 政宏 氏



——養成塾にはどのようなきっかけで参加されたのでしょうか

過去にも養成塾には当社から何人か参加していた、今回は昨年4月に私が部長に就任したタイミングでしたので、会社から参加するよう指名されたのがきっかけです。私はさいたま市の本社ではなく、普段は長野県の軽井沢技術センターに勤務して、講義がある日は毎回新幹線通っていましたので、「今朝の軽井沢は寒かったですか？」などと質問されることも多く、ちょっとした会話のきっかけになっていました。

——初回に参加されるまでは、養成塾にどのようなイメージがありましたか

まだ部長になったばかりで経営の知識もなく、前日まではすごく緊張していました。「どんな難しいプログラムをやるんだろう」とドキドキしながら初回に参加したことをよく憶えています。

初回は最初に参加者全員と名刺交換するのですが、経営者や役員、部長クラスの方が多くなか、そのなかでも20～30代の若い方や役職がない方もいて、いろいろな立場の方が参加されているなという印象でした。不安もありながら、回を重ねるごとに段々と慣れていったような感じです。

——どのようなプログラムが印象に残っていますか

最終回に行われた自社の経営ビジョンについての発表会が一番印象に残っています。全体が3グループに分かれ、グループの発表者を私が務めることになり、貴重な経験となりました。作成した自社のビジョンには、「自分の家族や親戚、友人を入社させたいような会社にする」という、前の講義のなかでとても感銘を受けた話を参考に取り入れました。今後の会社組織をどう変えていくべきか、どの

ような製品を作っていくべきか、どの事業に注力していくべきかなど、自社について深く考えるいい機会でした。経営の観点から日頃の業務知識や経験をどのように戦略に活かしていくのかということを多面的に学ぶことができたと思います。

——難しかった内容などありましたか

難しかったのは、合宿研修で学んだダイバーシティ&インクルージョンの講義でした。内容は理解できても、それを会社でどのように活かしていくかというレベルで考えていくと、「分かるようでよく分からない」といった感じでした。同じ合宿研修の2日目に行われた財務管理の講義も、普段あまり財務諸表に馴染みがなかったもので、数字をどう判断し経営に反映していくかという点が難しく感じられました。

——養成塾を修了し、全体を通して改めてどのような感想をお持ちですか

参加して本当に良かったと感じています。これだけ多くの異業種の方たちと知り合う機会もなかなかありませんし、参加者でLINEグループもつくり、一緒に同じ時間を過ごした仲間だという意識が強くなりました。ある社長さんは、LINEに「部活のときの仲間のような雰囲気を感じています」というコメントをされていたのが印象に残っています。

“経営幹部養成”と聞くと、どうしてもハードルが高そうなイメージを受けてしまいましたが、部長になる前の係長や課長職ぐらいのタイミングで学んでおいた方が、より勉強になるのではないかと感じました。早い段階から物事を多面的に、柔軟に考えられるようになると思います。学んだことを活かすも活かさないもあとは自分次第だと思いますので、絶対に活かすことができるよう、今後も精進してまいります。